

---

# 少女と魔物のタランテラ

ライムギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女と魔物のタランテラ

### 【Zコード】

Z8652Y

### 【作者名】

ライムギ

### 【あらすじ】

少女は逃げる。魔物は追う。

追つて、捕まえて、そうしてまた逃がす。繰り返されるそのやりとり。

それでも少女は逃げ続けることを選択する。そんな2人の物語。

けつこう流血描写が多いかもしれません…。ものです。ごマイペースに更新予定。

## 1 (前書き)

ご来訪いただきましてありがとうございます。  
けつこう流血描寫が多いかもしれません。ご注意ください。

早く、早く　　！

風よりも早く、音よりも早く、光よりも早く！

万の願いを込めて、駆けて、駆けて、駆け抜ける。

だがそれでもアニョーゼは手遅れだとわかつっていた。すでにそれは、すぐそばまで迫つてきている。

アニョーゼが必死の思いで踏み抜いた土を軽々と越え、傷をたくさんつけながら抜けた険しい木々を追い越し、あの空まで飛んでいきたいと思っていた青い天から、降つてくる。

そう、文字通り降つてくる。

地面に落ちる音すらしない。ただひたすら、優雅に、華やかに。そして絶望をもつて。

それは、彼は、枯葉の散る森の広間へ、飛び降りた。

アニョーゼの、すぐそばに。

「やあ、アニョーゼ。退屈だ。実に退屈だよ」

愉快そうにそう言いながら、アニョーゼの方へと近づいてくる。乾燥した落ち葉を踏みしめているのに、ほんのわずかも音すら立たず。

それでいて、存在感だけは圧倒的な力でこちらへ押し付けてくる。愉快な顔をした青年は、漆黒のシルクハットを左手に、青い薔薇を右手に持つて、近づいてくる。

「退屈だ。実に退屈だった

そう言いながら、美しい白い歯を見せながら、満面の笑みはまるで耳まで裂けるようだった。

口を背後に彼が迫りくる。影が、アニョーゼの深紫の髪を、そばかすの散った白い肌を、貧相な服に包まれた華奢な身体を闇へと導く。

影が、アニョーゼの汚れわずかに血の滲む足へと伸びた時、そつ

と彼女の頭に、シルクハットが乗せられた。

「おかえり、アーモーゼ」

その瞬間、悲鳴を上げる間もなく、少女はその森から姿を消した。

ひたり、ひたりと。

何かが落ちる音に、アーモーゼは田を覚ました。

「ひつ」

だがその瞬間身をこわばらせ、自らを取り巻く棘達に悲鳴を上げた。その声に喜ぶよつに、棘はその締め付けをきつくし、鋭い刺で青白い肌を刺激した。

ところどころ、すでに血が流れている。

だがその痛みで、アーモーゼはすぐに冷静になれた。まだくらべらする頭で室内を見回し、そこがいつもの部屋だといふことを悟つた。

蝶の光で艶やかに光る家具、すぐわきに見える天蓋のついた広いベッド。天蓋のカーテンやシーツのモスグリーンが、むらにアーモーゼの思考を整えていく。

そうして再び自分の体を見直し、深く息を吐いた。

（ああ、また捕まつてしまつた）

目を閉じ、意識を失う直前に見た男の顔を思い出す。白い肌、漆黒の髪、漆黒の服、赤い唇。

本来は整つているだらう造作も、醜悪に歪められた笑みの前では塵も同然だ。

カリエスティル。

それがあの男の名前だった。

（カリエスティル……）

頭の中で無意識にそつ言いながら、アーモーゼはそつと息をついた。下を向けば、棘まみれの下半身と、つま先から滴る血を受ける皿が置いてあつた。

白くつややかで、美しい紋様が意匠されたそれは、かなり高級品だろう。

かなり大きな皿だ。深く、広い。アーヨーゼが寝ころぶとまではいかないが、おそらく頭は軽く入つてしまいそうだ。首が落ちても、血が床に流れることはないだろう。それほど、深く大きい。

その皿の底のほうにわずかに流れる血の量を見て、アーヨーゼはここにきてそれほど時間がたつていないことを理解した。

血の滴る体を見ても、その表情は変わらない。絶望に涙することも、叫ぶこともない。叫ぶほど恐怖ではない。泣くほど絶望ではない。

こんなものではないのだ。アーヨーゼの知る絶望は、地獄は。

「退屈だつた。実に退屈だつた」

捕まる時と同じ言葉を言いながら、カリエスティルが部屋へと入つてきた。

相変わらず、物音をたてない。開けられた扉の蝶番すら、今は無口だ。足蹴の長い絨毯を踏みしめ、そつと、寝台近くでとらわれるアーヨーゼへと近づいてくる。

蠅燭に照らされた影が不気味に揺らめき、少女の顔に闇を宿す。不安に揺れる赤い瞳が、暗く濁つた。

そんな彼女の顔を見ながら、カリエスティルは喜色をにじませて笑つた。薄い唇が耳元まで弧を描き、白い歯が怪しく光つた。

「だがもう大丈夫だ」

長く白い指先が、そばかすの散つた頬を撫でる。と、瞬間その形の良い爪が伸び、少女の肌に突き刺さつた。

「つ……」

「だつてもう、捕まえた。捕まえた」

「……つ……ああ！」

頬をえぐる痛みに耐えきれず、アーヨーゼは悲鳴を上げた。

のたうてば、そのぶん蔓がきつく締まっていく。柔らかな白い肌に深緑の蔓が突き刺さり、深紅の赤い珠が浮き出、流れ落ちる。

足や腰から流れ落ちる血が、砂時計の砂のよつよつと白い器に降り注いでく。

ひたり。ひたり。

白い皿が、赤へと染まつていいく。

痛みからか貧血からか、すでに遠のき始めた意識中、アニコーゼは浅い息を幾度も繰り返した。

痛みと吐き気と酸欠に、気が狂いそうだ。

カリエステルは満面の笑みを浮かべながらその様子を眺めていたが、刹那、表情をそき落としたように無へと一変した。

耳元まで避けていたはずの口は一瞬にして平らなものとなり、どこか狂氣じみた悦楽の空気が、一瞬にして静謐な圧迫感に支配された。

ひつそりと揺れていた蠟燭すら、その動きを止める。

影がぴたりと少女の影に寄り添い、重なり合つ。

触れんばかりの距離で、カリエステルはそつと囁いた。

「おかえり、アニコーゼ。とても退屈だつたよ。玩具がないと退屈だ。次はもつと、近いところで隠れておいで」

深紅に濡れた指先が、そつと優しく、少女の唇をなぞる。影の中だというのに、しつとりと唇はつるおい、紅のようなつやがあつた。白い肌に浮かぶ毒々しいまでの艶やかなそれが、あどけない顔でひどく異色だ。

だがカリエステルはその様子に満足げに唇を弛めると、そつと少女の朦朧とした瞳を覗き込んだ。

長い漆黒の前髪から、青磁色の瞳がのぞく。

美しい瞳だつた。吸い込まれるような艶があつた。輝石のようにも美しく、しかし見ているだけで雄弁にものを語る瞳だつた。

その瞳があるだけで、青年の雰囲気が一変する。ひどく美しい存在となつた。

透けるように白い肌に、筋の通つた鼻。薄い唇はバラの花のよつに淡い紅色で、艶やかな黒髪がそつと輪郭を縁取る。

まるで精巧な仮面のよつたな顔に、ただその艶やかな秘色の瞳があるだけで、生気が宿る。すべてを魅了する、美しい魔物へと変化する。

アニヨーゼはその瞳を見た瞬間、勝手に目が潤み、血に塗れる頬を涙が伝つた。

(最悪)

最悪な状況だった。

全身の血は絞られ、穴だらけにされ。

頬の肉すらえぐられ。

そのくせ、珍しい男の瞳に身体が勝手に感動して涙する。

最悪な気分だった。

「お帰り、僕の玩具」

(最悪)

また捕まつてしまつた。

人など、遊べる食料でしかない男のもと。

幾度逃げても、どこへ逃げても、男は必ず追つてくれる。追つて、そうして手の中へと閉じ込める。

一瞬の悦楽ために。享楽のために。

涙で潤む瞳が、だんだんと霞んでいく。全身が重く、氷のよつて冷たい。目を閉じれば、そのままこの惨劇は終わりを告げる。

だが、死への不安はなかつた。

アニヨーゼはあくまで玩具なのだ。壊れてしまえば、意味はない。それは、彼が決して許さないだろ。

目が覚めれば、またいつものように、この惨劇などなかつたかのよつに、傷など一つもない身体で、知らぬ場所に放り出されているに違ひない。

(最悪……)

そうして、彼女ができるのは許されたわずかな時間で遠くへと逃げるだけだ。

幾度と繰り返される、長い長い鬼ごっこ。決して勝てぬとわかり

ながら、アニヨーゼはそれでもまた逃げる。

この美しい魔族が、それを望む限り。

魅入られた彼女に、真に逃げきるすべはなかつた。

## 2・桃色の髪の魔物

かろうじて道とわかる足場の悪い場所を、一人の少女が歩いていた。年の頃は15あたりだろうか。

子供というには少女の体には確かに膨らみがあつたし、女性というには、華奢な肢体とあどけない顔をしていた。

首もとで無残に切られた髪は茶色く汚れ、肌も同様に薄汚れている。黒ずんだ肌からはそばかすも見えた。

それに、身なりも大変みすぼらしかった。もとは美しかつただろうシンプルなワンピースも、今は色が判別つかないほどに砂にまみれ、ほつれている。胸元を止めるボタンも、いくつかとれたままになっていた。

しかし、疲れ果てた全身とは裏腹に、少女はしつかりとした足取りで歩いていた。

深紅の瞳も、強い光を宿して前を見据えている。

その様子はとても、数日前に魔族になぶられ打ち捨てられた少女だとは思わせなかつた。

彼女　　アニヨーゼがこの荒野に打ち捨てられてから、すでに3日の時が経過していた。

アニヨーゼが目覚めたとき、そこは満天の星と、草一つ生えない荒野しかなかつた。右を見ても、左を見ても岩と土しか見当たらぬ世界だ。

そばにあつた鞄には水と食料、そしていくばくかの路銀。とりわけ食料と水はざつと見て1日ほどの量で、ここがどこかわからず、いつ村や町にたどり着くかわからない状況では、たいそう粗末なものだつた。

だが、アニヨーゼは絶望などしていなかつた。

素早く身支度を整えると、汚れた革靴のひもをしっかりと締め、歩き始めた。

激しく光る星空を見ながら、田印となる星を見つけただその方向へと進む。彼女に、この場所がどこか、どこに向かっていけばいいかなどわからない。

だが、その歩みに迷いはない。

なぜなら、彼女はすでにこのよくなことに慣れ切っていた。あの魔族と出会いつてから、すでに数十回と繰り返されてきたことだ。いつも見知らぬ場所に放り出されてしま、次に追手が来るまでただひたすら逃げるだけだ。

初めのころは民家に近い場所だつたが、今ではこうして荒野に打ち捨てられるのも珍しくはない。

それに、男がアニヨーゼを殺すのではなく、捕まえるのが目的だと今では知つているため、歩いて数日の距離に村か町があることはわかつっていた。

星を田印にして歩くのは、そこがアニヨーゼの主が住まつ場所の真上に光る星であり、その方向に進めば必ず村ないし町に行き当たる、という経験からだ。

確証などない。

だが、アニヨーゼは今までそれによつて生き残つてきた。

だから、彼女は迷わずただ歩く。それが、自分の命を助ける道へとつながると信じているから。

だが、そう決意してから、すでに3日の時が経つ。食料はもちらん、水もすでになくなつていた。

ただひたすらに歩き続けているせいか、砂と岩しかない台地はわずかだが湿りを帯び、岩陰に草が見え始めた。

だが、周囲には何もない。

木も、水も、人の影も。

アニヨーゼは白みゆく空を見つめながら、思わず不安に顔を染め

た。

(カリエ……)

こんなことは初めてだった。

いつもは、そこがどこかわからなくて、モビ「かにカリエの息吹を感じた。彼の領域にいると、確信できた。

だが、歩けば歩くほどその気配は薄れ、今やほとんどわからなくらいだ。

彼を象徴する星へと向かっているはずなのに、ちつとも近づかない。まるで、何かに阻まれているかのように。

それに、これほどまでに生命の危機を強いられるのも初めてだった。

(もうすぐ夜が終わる)

星たちの争いも一時休止をし、薄暗くなつた夜空ではもはやほとんど星の存在を確認できない。

完全に見えなくなれば、また半日を暗闇に隠れるように休むしかない。果たして、その次の夜にカリエは目覚めることができた。どうか。

すでに体力は限界にまで来ていた。

目を細め、青白い空に浮かび上がる、岩ではない凹凸を見つめる。夜明けまでに、何としても縁のある場所にたどり着いておきたい。水さえ確保できれば、何とかなるはずだ。

アニヨーゼは、疲労に痛む足に叱咤をして再び歩き始めた。のどはカラカラだし、口の中は砂だらけだ。空腹はすでにピークを通り過ぎ、痛みを訴え始めていた。脳は栄養不足のせいからまく回らず、体は鉛のように重い。

(どうして、あたしはこんな場所を歩いているんだろう……)

いつまでこの道は続くのか。今回は、歩けど歩けど人の気配がない。本当にこの先に民家があるのかもわからないのだ。

いつたいいつまで続くのだろうか。答えのない問いは、すでに何度もされたものだ。

擦り切れ砂だらけの靴も、汗や汚れで異臭を放つ服も、疲労で倒

れそうな身体も、すべてがアーヨーゼを追い詰める。

すぐそばに、耳元の横に。もしかすればすでに頭の中に。

そつとそばに潜み、囁いていくのだ。ジー・ゼーという時を狙つて。

死という誘惑を。

逃げるがいい。何度も。だが、必ず私が捕まえる。絶対に、だ。お前が死ぬまで続く鬼ごっこだ。死ぬまでな。

脳裏に響いた声に、少女は一瞬足をとめた。

生々しい声だった。

たつた今、耳元で囁かれたような、吐息すら感じる声だった。

荒れた唇を青く染め、頬りなく視線をそのままよわせる。しかし辺り

にあるのは、ただただ砂と、荒れ狂う夜空の星のみだ。

後ろにも、前にも、それしかない。

何もない。

ふいに、砂漠の中で異質な音がする。少女が奥歯をかみしめる音

だつた。

（負けない。絶対に、捕まらない！）

一瞬でも誘惑に負けそうになつた自分に憤怒しながら、アーヨーゼは荒々しく足を進めた。

（カリエ……）

朦朧とした頭で、アーヨーゼは3日前のこと思い出す。

男に捕まつた間の狂宴は、時間にすれば一晩のものだった。

それも、アーヨーゼの意識があつたのはわずか十数分のみだ。あとは意識がなく、そうして、目が覚めれば見知らぬ荒野で打ち捨てられていた。

だが、それだけで誘惑はいとも簡単に退いていく。すがりつく暇さえ与えない。

カリエステルという男は、死よりも恐ろしい男だった。

そうして、死よりも残酷で 魅惑的な男だった。

たつた十数分の逢瀬のために、アーヨーゼは今の苦痛を耐え忍ぶ。あの美しい悪魔に負けた彼女は、すでに死すら平等な存在ではない。

彼の、奴隸なのだ。

何にも束縛などされていない。だが、彼女の心がすでに隸属していた。

だから、彼女はひたすらに歩く。肉体が限界を超えて、魂が悲鳴を上げても。

いつの間にか、少女は意識を失っていたのだろうか。

はつと気が付けば、緑あふれる森林に囲まれた木陰だつた。寝そべる場所も、水分に満ちた雑草の上だ。

ついたまほどのあつたはずの砂や土、荒野はどこにもない。

「うつ……」

身動きをしようとした途端、襲う頭痛と吐き気に思わずつめく。

頭が割れそうに痛く、気持ち悪い。意識が霞んでいた。

いつたい自分の体に何があつたのだろうか。

融通の利かぬ体を、左手を杖にして無理やり起こす。

その途端、視界に飛び込んでくる木々の連なり、美しい日だまりとやさしい木陰。見渡す限り、信じられないほど緑があふれている。どれもこれも見たことがない植物ばかりだが、みな背が高く葉が青々として力強かつた。荒野の景色が嘘のようだ。

いや、この緑こそ幻なのかな。

しかし、あの場所と違つてここはひどく澄み、湿氣ている。とても幻には思えない。

果然としながらあたりを見回せば、ふいに甘い香りが漂ってきた。何かの音もする。

水だ。

すぐ近くに小川もあるのか、水の清廉な香りがアーヨーゼを刺激した。とたん疲労など吹き飛び、這つようすに進んで、音のするほうへと向かう。

大して進まぬうちに、小さな水の流れに行き当たつた。

アーニー・ゼの上半身もない川に顔を付け、むせぼるよつて水を飲みこむ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

しかし、すぐに吐き出した。あまりに脱水症状が続いたためか、胃がすぐには異物を受け入れないためだ。

嘔吐感がこみ上げ、堪らず吐き出していた。繰り返し込み上げる吐き気と、胃液の苦みと焼けるような咽喉の痛みに涙がこみ上げた。体力の消耗に倒れこみ、それからゆっくりと、舐めるように水分を摂取する。

少しづつ飲み込まれる水分は、まるで枯れた大地に水を与えるようだ。アーニー・ゼの体に染み込んでいくのがわかつた。

そうしていると、いつのまにか、彼女の背中に触れる優しい手に気づいた。

「そうよ。少しずつ、ゆっくりと。焦つてはだめよ」

驚きに顔を上げれば、桃色の髪を持つ美しい女性が、そっとアーニー・ゼの背をやさしくなでていた。

美しいが上品な顔立ちで、丸いレンズの奥には、浅葱色の瞳が優しく瞬いでいる。

長い髪は丁寧に編みこまれ、頭部で一つにまとめられている。豊満な身体はき折り目正しい縦襟のシャツとドレスに包まれ、淫らな様子など匂わせない。

「いいのよ。今は、自分のことに対する専念しなさい。あなたはもう少し

で、死ぬところだったのだから」

小さいがふつくらとした唇が、優しく弧を描き、そう語る。語りれた声すら、透きとおりて美しい。それほど大きな音ではないのに、自然と耳に入ってきた。

その穏やかな口調と美しい声に、不思議と逆らひ気にならぬ、アーニー・ゼは女性の言つとおり再びゆっくりと川の水を飲み始めた。そうしてどれほどの時が経ったのか。

本能での欲求が満たされたせいか、急に深い疲労を感じ、アーヨー<sup>ゼ</sup>は再び意識を失っていた。

ピークルルルルルル、ピークルルルルル

（なに……？）

不思議と耳あたりの良い鳴き声に、ゆっくりと意識は覚醒していく。

眩しさはさらにそれを助長し、体の重さや、澄んだ空気の香りを脳が意識しだした。

寝返りを打てば、肌を滑るシーツの心地よい感触に、思わず笑みが浮かぶ。このよつた朝を迎えるのは、いつたいどれほど前のことだろうか。

きつと夢に違いない。

だが、それでもひどく幸せな夢だった。

夢見心地の意識が、鮮明になつたのはそのすぐ後のことだ。

先ほど聞こえた動物の鳴き声が、すぐそばで聞こえる。それと同時にすぐ近くで羽音が鳴り、アーヨー<sup>ゼ</sup>の意識を一瞬で現実へと引き戻した。

「うわっ！」

顔に触れた何かに飛び起き、寝台の端へと非難する。身構えて見れば、大きな出窓を背に広い寝台と 何とも美しい鳥が、アーヨー<sup>ゼ</sup>の寝ていたであろう枕へと降り立つていた。

「鳥……？」

すると先ほどした鳴き声は、この美しい鳥のものだらうか。

青と黄色の混じつた鋭い嘴は、今は閉ざされ、無垢な浅葱色の瞳がこちらを見ている。桃色の羽毛は頭部にいくほど濃くなり、逆に足元はうつすら黄色がかっている。尾は長く、しわの寄つた寝台に青や碧色の美しい色が広がつていた。

大きくもないが、決して小さくもない。

野宿には慣れていても、動物に慣れていないアーヨー<sup>ゼ</sup>は、その

鳥の登場に思わず顔をこわばらせた。

鳥のほうもそんなアーヨーゼを観察するよつこじつと見つめ、怯えた様子もない。

ひどく人馴れしているようだった。

そんな物言わぬ鳥に、アーヨーゼはますます困惑に眉を下げる。こんなことは初めてだった。

動物 それも鳥に接したことなど、今まで一度もない。

もちろん動物自体は見たことも触れたこともあるが、それはかなり幼少の頃で、牧羊犬や羊やヤギといった家畜ばかりだ。

それに、ここ数年はただひたすら逃げては捕まり、また放られて逃げるという生活をしてきた。アーヨーゼにとつてはただそれだけが全てだったから、動物という存在とは無縁なのだ。

こんなにも近くで、それも、これほど美しい鳥を間近にして、正直どうすればいいのかもわからない。

ピールルルルルルル、ピールルルルルルル。

そんなアーヨーゼの戸惑いなどどこ吹く風で、鳥は再び愛らしく鳴くと、そつと飛び立ち、彼女のほうへと向かつてきた。

「！」

恐怖が先だつて目をつむる。

しかし、予期した衝撃はなく、感じたのは撫でるよつこじらかい風と、甘い香りだけだった。

（あれ……？）

何うよつこじらかと目を開ければ、視界にあるのはただ白い寝台だけだ。

慌てて周囲を見回しても、美しい鳥はすでに姿を消し、広い室内のどこにもいない。大きな出窓にも、寝台にも、そばにあるテーブルや、チェスト、奥のクローゼットにも。

どこにもあの美しい鳥はいない。

ただ。

「何かお探しらしら？」

「……！」

ただ、豪奢な扉の前には、いつの間にか女性が佇んでいた。

色の白い、美しい女性だった。

小ぶりだが筋の通った鼻の上左右には、大きな瞳が柔軟に細められ、春の花のように淡い薄桃色の唇は、今は優しく弧を描いていた。肌は透き通りのように白く、肌理細やかだ。桃色の長い髪は頭部で几帳面にまとめられ、華奢だが豊満な身体は、糊のきいたスタンドカラーのシャツと上品なドレスに包まれ清廉とした印象を与える美しい女性だった。

だが、それだけではない。

彼女の魅力は、顔や身体の美しさだけではない。  
何よりも その、浅葱色の瞳こそが、彼女の存在感を現していた。

魅入られるような、惹きつけられるような、誘われるような瞳だつた。

（魔物だ……！）

アニヨーゼは、とっさに身構えた。飛び移るよつて枕元へと移り、窓の外へと気を配る。

青の色を持つ瞳は、魔物の証である。見る物を惹きつけてやまない、その瞳が何よりの証拠である。

それは見る物を誘惑し、墮落させ、隸属する瞳。彼らの力の象徴。「そんな顔をしないで、大丈夫よ。わたへし私は、あなたに危害を加えるつもりはありません」

「……」

「約束するわ

鋭くにらみつければ、女の魔物は困ったように微笑んだ。

細められたその瞳すら、美しい輝きを持つ。青の色も濃い。おそらく、魔物でも比較的力の強い存在だろう。

（でも、だまされない）

彼らが優しいのは、美しいのは外見だけだ。

警戒を解かない少女の姿に、美しい魔物は嘆息する。だがアーヨー<sup>1</sup>ゼはその動作すら身をこわばらせ、今にも窓へと飛び出そうだ。美しい女性は困ったように一息つくと、その直後、浅葱色の瞳が色の濃さを増した。

「私の名はアマディウス。名に誓いましょう」

静かな声で、そう告げた。

しかしその刹那、アーヨー<sup>1</sup>ゼの身体を確かに圧迫感が襲つた。一瞬目の前が暗くなり、ガシャンと錠の落ちた音がする。

鍵がかかる、名の誓約がなされる音だ。

（……カリエ……）

こちらに害がないとはい、勝手になされた誓約に不快感が募る。アーヨー<sup>1</sup>ゼのすべては、あの魔物のものだというのに。だが、迫られた契約を跳ね返すことはアーヨー<sup>1</sup>ゼにはできない。資格がないのだ。人は契約に縛られない。縛られるのは、魔族だけなのだから。

少女は怒りに頬を紅潮させ、今度こそ、女性アマディウスを睨みつけた。

「私の名はアーヨー<sup>1</sup>ゼ。貴方の誓約を受諾します」

その赤い瞳に鋭い光を宿し、弱さを見せぬ様子でそう告げる。しかし目の前の魔物は、ただ優しく微笑むだけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8652y/>

---

少女と魔物のタランテラ

2011年12月31日21時46分発行